

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 木澤 景

本論文は、源信『往生要集』を、一人の修行者の自己探求の書として読み解き、思想史的  
位置づけの根本的見直しを試みたものである。従来の『往生要集』研究は、本書を、龍樹か  
ら法然、親鸞へと至る浄土教展開史の一齣と位置づけその意義を探るものが大半を占めて  
いた。それに対して本論文は、法然、親鸞を到達点として前提する従来の『往生要集』評価  
を括弧に入れ、テキストに内在して『往生要集』の論理を問い、源信の内面にまで迫ろうと  
する。

従来の通説では、『往生要集』は、末法の世の、修行に耐え得ない衆生のために、往生極  
楽の易行である念仏行を選び勧めた書とされてきた。論者は、まず、このような通説的評価  
に対して、(1)『往生要集』のテキストが表明する時代意識は、いわゆる末法意識とは異なる  
こと、(2)阿弥陀仏や往生極楽が注目されているのは、極悪の衆生との機縁のゆえではな  
く、極悪の衆生すらも出会い得るといふ遍在性のゆえであること(3)念仏の「易行」性は、  
行の簡略化ではなく、凡夫から成仏へいたる道筋の見通し易さの意で捉えられていること  
を、本文に即して精密に論証する。その上で論者は、源信の時代意識を、多種多様な「諸教  
の興隆」する教行の乱立状態と押さえ、『往生要集』固有の思想的課題は、そうした状況の  
中で揺れ動く凡庸な行者(頑魯の者)たる自己の心を、いかにして一つに収斂するのかとい  
う主体的・実践的な問いにあったと考える。

論者によれば、『往生要集』は、多様化する教行を、念仏行を軸に再統一すると同時に、  
源信自身の内面を仏心へと収斂させる主体的実践の書である。この収斂の過程は、まず自心  
を自覚的に出発点として位置づけ(厭離穢土)、次に凡夫の心と究極に想定される仏心とを、  
その間の落差の意識(極楽の十の楽の称賛)によって結びつけ、さらにそれを正しい行へと  
置き換えること(四弘誓願、観想)で遂行される。そしてその遂行過程自体が『往生要集』  
テキストの論理構造となっていると論者は捉える。

以上、本論文は、念仏行を軸に多様な教行を総合していく『往生要集』テキストの論理構  
造そのものが、自己の心を内省し仏心への階梯を自覚的になぞる営みであることを明らか  
にする。テキストの述作活動そのものが、自己内部の言説の実現でもあると見る観点は、従  
来の研究には欠けており、その空白を埋める一つの構想を提示したことは、『往生要集』研  
究を大きく進展させる新成果であるといえる。その一方で、テキストへの内在が優先された  
結果、当時の天台教学全般が抱えていた課題といったテキスト外部の文脈とのつき合せに  
不十分な点があるなど、問題がないわけではない。とはいえ、「心」の道行きをキーとして  
『往生要集』の論理構造の統一的な読みを示したことの意義は大きい。よって審査委員会は、  
本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものであると判断する。